

184 米須按司の敵討ち

首里ぬよー、何御殿でいがいんでいがらやー、長男
とう次男ぬ生まりやーにや、長男えーなー、成長な
くとう、ぼーちりむんなやーに、次男が秀りていや。
くぬ長男がまた、美らさる女よー、皆自分ぬ勝手に
せー、侍んでいるうりさーに。

さくとうなー、親ぬ、かんたるむん追い出じゃしわ
るやるんち、次男ぬかい、うぬ御殿殿内えー継がさ
に。

うれーなー首里からー逃んぎてい来にやー、あまは
いくまはい、かんし渡てい来に、南山ぬかい来やー、
南山うてい、南山ぬ按司ぬ、馬ぬ草刈やーはじめてい
から、しんでーしんでー、うまをうてい信用さつてい
使かーつてい位あがたくとうや、南山ぬ妃、いつペー
美人やみせーたんでい。

うりが、米須按司ぬ娘子やんせーたんでい、南山ぬ
妃、あさーい、うぬ、やまちりぼーちり者のー、名ん
よー、やまししなやーに、うりんかいあかしんでい
る言いたんでいるばー、やまししんでいや言らん、か
んねーるあかしんでいち、ぬき者やたんでい。

あんさーい、今度また、南山ぬ妃んかい、野心いだ
ちやーにや、なー美さるあくとう、南山王んかい船遊
びさすてい、浜んかいさすてい行ちゅーい、南山王や
いつペー可愛する犬ぬをうたんでい。

犬しーてい、南山王しーてい、また、うぬあかし
しーてい、浜遊びしーがんち行じ、あまんじ、殺さー
に、砂ぬ中んかい埋みていよー、あかししが南山王殺
ち、妃とういんでいち、あんさーい、私がたたかい
でいすが、ぬーくいーしよー、むる嘘むにーだんだ
んすんちさくとう、妃、察しやーに、くれーくりがる
謀反するんでいちよー、しんでーしんでー妃んかい、
たくみに言寄ていんじやくとう、

首里のね、何とかという御殿かにだそうだが、長男
と次男とが生まれていて、長男はもう、おおきくな
と、暴れ坊になつて、次男が秀れていたそうだ。

その長男はまた、きれいな女性をね、みんな自分の
勝手にして、侍という権力で。

それでもう、親が、こいつはもう家から追い出さな
ければと追い出し、次男に、その御殿殿内は継がせて。

その長男の暴れ坊は首里から逃げて来て、あっち行
きこつち行きして、渡り歩いて来て、南山に来てね、
そして南山で、南山の按司の、馬の草刈をはじめて
それから、そしてしだいしだいに、そこで信用されて
使われて位もあがつたので、また南山按司のお妃は、
たいそう美しい方だったそうだよ。

その方が、米須按司の娘だったそうだよ、南山按司の
お妃は、それで、その暴れ坊のやくざ者は、名前も、山の
猪のようだと、その暴れ坊にはアカチシと言うんだそ
うだ、山の猪ヤマシシのようだが、ヤマシシとは言わ
ず、こんなアカチシと言つて、のけ者だったそうだよ。

それでもう、今度はまだ、南山按司のお妃に野心を
いだいて、もう美しい方だから、南山王を船遊びにさ
そつてさ、浜にさそつて来て、ところが南山王にはとつ
ても可愛いがつている犬が居たそうだよ。

犬も連れて、南山王と一緒に、また、そのアカチシ
も一緒に、浜遊びしにと行つて、むこうで、南山王を
殺して、砂の中に埋めてね、このアカチシが南山王を
殺して、お妃さまを取ろうと、そして、私が戦おうと
したが、とかなんとかと言つて、まったく嘘のありつ
たけつこうとしたので、お妃はお察しになつて、こい
つは謀反をたくらんでいると、するとこのアカチシは
しだいしだいに、ことば巧みに言い寄つて来たので、

うぬ妃また、

「なま按司加那志ん死しんそーちやー、間（ま）ん日（ひ）ん経（た）らん、いのーやぬこーぶぬんうちなち、んちゆうぬこーぶぬんうちなちから、御側（ごせ）なかいなくとう」んでいち、落着（おち）きやーに。

あんさーに、妃（み）また、米須按司（よめ）ぬ所（ところ）んかい、父親（いさかん）ぬみーんかい行（い）じよー、

「なーくれーちやーしさらー、敵打（かたき）ちゆがやー、私（わん）にんかい武勇（ぶゆう）ならーちくいみそーり、くり夫ぬ敵討（かたき）たんねーならんくとう」んでい言（い）ちさくとう。

米須按司（よめ）えー、

「いやーよーなー、女（い）ぬやー、うふいなぬ男（い）んかい、いやーや敵討（かたき）ちゆんでいさんてーまんやー、いやーがちやーんならんさ、いやー、相手（あ）んかい殺（ころ）はりーしるおちやる、あんすしゆか、頭（あたま）ちかれー。うりが妻（うづ）なりんでい言（い）ねーやー、山（やま）ぬ中（な）んじやー、私（わん）にだてーん家（や）ん造（つく）ていとうらち、海（うみ）ん見（み）るぐとうし、だてーんぬ

そのお妃は、

「まだ按司加那志もお亡くなりになつて、日も経つていない、あたらしい法事（ほふし）こともすまして、三年（さんねん）の法事（ほふし）もすませてから、お側にまいますので」と言（い）つて、アカチシを落（お）ち着（き）けて。

それで、お妃は、米須按司（よめ）の所（ところ）に、父親（いさかん）のもとに行（い）きになつて、

「もうこいつは、どんなふうになれば仇討（あだ）ちできますのかね、私（わん）に武勇（ぶゆう）を教（し）えてください、こいつの夫（う）の敵（かたき）を討（う）たねばなりませんので」とおつしやつたと。

米須按司（よめ）は、

「おまえは、女の身（み）で、あれだけの男（お）に、おまえが仇討（あだ）ちをしようとしたところで、おまえがどうにもならないよ、おまえが、相手（あ）んに殺（ころ）されてしまうのがおちだよ、そうするより、頭（あたま）を使（つか）いなさい。そいつが妻（うづ）になりなさいと言（い）つたら、山（やま）の中（な）に行（い）つて、私（わん）に大きな家（や）を造（つく）ってください、海（うみ）も見（み）えるようにして、大きな

城（しろ）造（つく）ていとうらち、あんし二人（ふたり）住（す）めーくとう」んでい言（い）やーによ、父（ふ）親（しん）ぬ教（し）えらーしんそーちやー。

とーまた、うぬ城（しろ）造（つく）いる、木（き）選（い）びーがんでいやーによー、くぬ国吉（くにきち）から与座（よざ）んかいかんし、んぐとうーしやー、かーま高良（たから）んにーんかいよー、むる連（ち）がつてい山（やま）やたんていよー、大（お）山（やま）やたんてい、ガジ原（はら）までい山（やま）やたんてい。

あんさーに、あまんじん、くまんじん、うぬアカチシえー

「とー、くぬ木（き）やないみ、尺（しゃく）測（はか）ていんでいんでい」言（い）ち、くんぐとうーし、だちやーに、あんさーにガジ原（はら）んじえーや、

「とーくぬ木（き）やれー、あたいがやー、とーまじ、かんしいちえーみ、測（はか）ていんるわ、私（わん）ねー丈（た）測（はか）らるー」んち、丈（た）測（はか）いねーびーしよー、釘（くぎ）えー隠（かく）くわち持（も）つちゆくとう。しぐくまんかいよー、釘（くぎ）打ち（うち）くでい、

「いやー夫（う）ぬ敵（かたき）いやーひやー、ガジバルフーなてい、

城（しろ）を造（つく）ってください、そして二人（ふたり）で住（す）ましようと言（い）いなさい」と、父親（いさかん）が教（し）えてくださったそうだよ。

それで、そのお城（しろ）を造（つく）る、樹（き）を選（い）びにといつてね、この国吉（くにきち）から与座（よざ）にかけてこうして、ずっと、高良（たから）のところまでね、ずっと連（ち）なつて山（やま）だったそうだよ、大きな山（やま）で、ガジ原（はら）まで、山（やま）だったそうだよ。

それで、山（やま）に行（い）つても、どこ行（い）つても、そのアカチシは、

「どうだ、この木（き）は材木（ざいぼく）にできるか、尺（しゃく）をはかつて見（み）よう」と言（い）つて、こんなふうな、抱（か）いて、それでガジ原（はら）では、

「どうだ、この樹（き）ならば、できるかな、さあまず、こうして合（あ）うかどうか、測（はか）りなさい、私は丈（た）を測（はか）るから」と言（い）つて、丈（た）を測（はか）るまねをして、釘（くぎ）は隠（かく）してもつているから、すぐここに打（うち）ち込んで。

「おまえは夫（う）の敵（かたき）のおまえは、ガジバルフーになつ

うぬ木とう一緒立ち枯りしよー」んでい言やーに、あんさーに、うぬガジバルムークーなたんでい。

あんさーに、私達祖父母達が青年時代よー、あまにかい田ぬ有しが、ありかーまんぐらをうてい田打ちーねー、なー三時ぐるから後ないねーよー、自分一人る田打ちゆしが、側をうていんポトンポトンしよー、田打ちちよー、打ちゆしが居んでいるばーよー。

あんさーに、またなー、芋とう汁とう持つち、昼食やせーや、うぬ残やなー午後食るむんでいち、残しーねーよ、むる饅てい食まらんよー、うりが、精やうち食てい。

あんさーにまた、馬追いうていよー、ガジバルフーぬ話しーねーよー、御香火ぐわーぬぐとうし、光やーにスルスルし来たんでいよー、あんさーに、うりひやーなー、ガジバルフー来んどーひやーんでいやーによー、皆逃ぎていよー。

馬ん家ぬ天井んじ寝じゆさやー、しぐ馬鼻ふちぶー

ないしよー、うままでい追らつてい、翌日起きてい見ねーよ、馬ぬほーよー、むる御香火やーちゆー焼かつとーたんでい。

はなしんならんたんでい言んどー、じゆんに、スールない来たんでい、ガジバルフーくびくえーちびくえーしーによー、恐むんやたんでい。

あんさーにまたやー、馬ぬ顔にんやー、御香火やーちゆう焼かつていよー。

字与座 城間ウシ

て、この樹とともに立ち枯れなさいよ」と言つて、それで、そのガジバル婿になつたそうだ。

それで、うちの祖父母や父母たちの青年時代、むこうに田んぼが有るが、あのあたりで田んぼを打つ時には、もう三時頃から後になると、自分一人で田んぼを打っているのだが、そばでもポトンポトンと、田んぼを打つ人がいるということだよ。

それで、またもう、芋とおつゆをもつて、朝食だから、その残りはもうお昼ご飯に食べるのでと、残しておくと、全部すえて食べられなくてね、そいつが、食べ物のは精は食べてしまつて。

それでまた、馬場でね、ガジバルフーの話をするとな、線香の火のように、火が光つてスルスルスルと出て来たそうだよ、それで、またもう、ガジバルフーが出て来たよと言つて、みんな逃げて行つたそうだよ。

馬小屋の天井に隠れて泊まるとね、すぐ馬は鼻をプー

プー鳴らして、そこまでも追われて、翌日起きて見ると、馬のほとが、ぜんぶ線香の火で、お灸がすえられていたそうだよ。

はなしも、できなかったといわれているよ、ほんとに、スルスルと出て来たそうだよ、ガジバルフーはほんとうに、恐ろしいものだつたそうだよ。

それにまた、馬の顔にもね、線香の火でお灸をして焼いてあつたそうだよ。